

目次

新会長あいさつ 「『社会全体で子どもを育てる時代』の幼児教育史研究 ——2014-17年・会長をお引き受けして——」	太田素子
第10回大会報告	
研究発表・シンポジウム	
総会報告	
「第10回大会開催を終えて」	小玉亮子
大会参加記	朴淳香・井本美穂
寄稿 「教育学の＜戦前＞責任 シンポジウム『子どもと戦争』によせて」	宮澤康人
追悼	
「岡田正章先生を悼む」	宍戸健夫
「岩崎次男先生を悼む」	別府 愛
「立浪澄子理事を偲んで」	梶瑞希子
新入会員情報	船勢 肇
新入会員・会員異動	
新事務局からのお知らせ	

新会長あいさつ

「社会全体で子どもを育てる時代」の幼児教育史研究

——2014-17年・会長をお引き受けして——

太田素子（和光大学）

先の総会で宍戸健夫前会長からバトンタッチを受けました。宍戸会長は十年の長きにわたってこの学会の創設と基礎固めの時期に会長を勤められました。言葉ではつくせない深い感謝を申し上げます。前会長のような仕事は到底できませんが、若返った理事会の気鋭の研究者のみなさんと一緒に、率直で創造的な討論のできる、また幼児教育研究にふさわしい暖かく相互理解にみちた学会の文化を育てていけたらと念じております。

今回の保育制度改革については、皆さまも必要感とともに様々に心配を感じておられることと思います。日本保育学会などは幼児教育の社会的な評価を高めようと、数量化を伴う発達の縦断的な研究に、日本でも力を注ごうとしています。私たちの固有の課題である過去との対話も、一つには、このような現代の課題を意識しつつ深めることで、創造的に深化するのでしょうか。（個人的には、歴史研究における発達の縦断的な研究——数量化ではなく、ナラティブアプローチによって——も時間が作れたらとりくんでみたいなどと考えています。）

また、保育系の大学が四大化し、保育・幼児教育の研究教育の質の向上が急務と考えられています。四大化の進捗で幼児教育史研究者が増える可能性を考えれば、これまでの研究の到達点を整理し今後につなげる課題も学会として大切でしょう。学会としてとりくむ十周年記念の辞典編集が、编者のご努力で軌道に乗りそうで心強い限りです。三年間でできることは限られていますが、一つひとつとりくんでいけたらと思います。

この学会の特徴の一つに、幅広い年齢層の会員の参加があります。ぜひ若手とシニアが気兼ねなく議論し、それぞれに活用していただける場として学会が発展しますよう、ご一緒に楽しんで運営して参りましょう。どうぞよろしくお願い致します。

第10回 大会報告

宍戸健夫（愛知県立大学名誉教授）より大会挨拶があった後、研究発表、シンポジウム、総会が行われた。

研究発表

司会：一見真理子（国立教育政策研究所）

福元真由美（東京学芸大学）

(1) 中村五六の幼児身体認識について

朴 淳香（鶴見大学短期大学部）

(2) 戦時下の東京女子高等師範学校附属幼稚園 ――「日誌」の記録を中心に――

松島のり子（お茶の水女子大学）

織田望美（お茶の水女子大学・院）

(3) 『幼稚園のための指導書 音楽リズム』（昭和28年）の音楽傾斜

――保育要領改訂委員会資料（昭和24年）と関係者へのインタビュー調査から――

田邊圭子（北陸学院大学）

(4) 昭和31年度「幼稚園教育要領」の作成過程におけるアンプローズ、ユアーズの関与

――CIEカンファレンス・レポート、ウィークリー・レポートを中心に――

織田望美（お茶の水女子大学・院）

シンポジウム テーマ「子どもと戦争」

司会：

小玉亮子（お茶の水女子大学）

提案者：空襲・疎開から見た「戦争と子ども」

米田俊彦（お茶の水女子大学）

『原爆の子』と戦後教育――反戦メディア――

寺岡聖豪（福岡教育大学）

指定討論者：コメント――幼児教育史の立場から――

湯川嘉津美（上智大学）

第10回 総会報告

報告事項

1. 第9回大会年度（2013/14年度）会務報告

(1) 会員数（村知事務局長）

- (2) 第9回大会の開催（村知事務局長）
- (3) 『幼児教育史研究』第9号の刊行（小玉編集副委員長）
- (4) 会報17号、18号の発行（村知事務局長）
- (5) 役員選挙の実施（村知事務局長）

2. その他

審議事項

1. 新役員と新事務局の紹介（太田新会長）
 - (1) 理事：浅野俊和、阿部真美子、一見真理子、太田素子、勝山吉章、小玉亮子、高田文子、梶瑞希子、福元真由美、村知稔三
監査：遠座知恵、首藤美香子
 - (2) 会長：太田素子／副会長：梶瑞希子／事務局長：小玉亮子
 - (3) 新事務局：お茶の水女子大学・小玉亮子研究室
2. 第9回大会年度（2013.10.1～2014.9.30）決算（別府理事）
2014年度決算について 別府愛理事（会計担当）より報告された。（省略）
3. 第10回大会年度（2014.10.1～2015.9.30）事業計画（小玉新事務局長）
 - (1) 機関誌『幼児教育史研究』第10号の発行
 - (2) 会報の発行（年2回）
 - (3) 第11回大会の開催
 - (4) その他
4. 第10回大会年度（2014.10.1～2015.9.30）予算案（福元新理事）（省略）
5. 第11回大会の予定（高月実行委員長）
福山市立大学、2015年12月5日、翌日に関連する内容のエクスカージョンを予定
6. その他
会則改正

第10回大会開催を終えて

小玉亮子（お茶の水女子大学）

幼児教育史学会第10回大会は例年どおり2014年12月6日にお茶の水女子大学で開かれ、皆様のご参加とご協力が無事に終わることができました。心よりお礼を申し上げます。大会の準備のために、現在、お茶の水女子大学でリサーチフェローの松島のり子会員と日本学術振興会特別研究員の織田望美会員と小玉との三名で大会実行委員会を作りました。有能な若手会員の力をえて準備をおこないましたが、当日には行き届かない点もあったことと思います。どうか、ご容赦のほどお願い申し上げます。

今大会のシンポジウムは、2014年が第一次世界大戦開戦からちょうど100年目にあたることから、「子どもと戦争」というテーマを掲げました。会員外から、戦時下・戦後の教育を考えるためのご報告をいただける発表者として、米田俊彦氏（お茶の水女子大学）、寺岡聖豪氏（福岡教育大学）の両氏に報告を依頼し、湯川嘉津美会員（上智大学）にコメントをお願いしました。戦時下の幼児たちのおかれた状況や、また戦時下に教育学者たちがどのように行動をしたのか等、これまでの研究に再考を迫る充実した報告とコメンテーターからの問題提起に学ぶところの多かったシンポジウムとなりました。報告者・コメンテーターの三名の方々にはあらためてお礼申し上げます。午前中には、4つの研究報告がなされ

ましたが、いずれも緻密な資料に基づいた発表で、幼児教育史研究が着実に進められていることを感じることができました。

加えて、本大会では、4つの関連企画を準備いたしました。鼎談「子ども・戦争・歴史」（11月21日）と、お茶の水女子大学附属幼稚園見学（12月5日）、お茶の水女子大学歴史資料館における展示「戦時下の保育—東京女子高等師範学校附属幼稚園資料特別展」（11月21日、12月5・6日）、海外の幼児教育史の研究動向を愉しみながらフォローする会（12月7日）です。

特に11月には、本学会の後援によって開催された、本田和子氏（お茶の水女子大学元学長）、宮澤康人会員（東京大学名誉教授）、山本秀行氏（こども教育宝仙大学学長）による鼎談では、150人を超える参加者をえて、非常に重要な議論をお聞きすることができました。ご登壇いただきました先生方には心より感謝申し上げます。鼎談と大会シンポジウムと両方で、「戦争」という主題を扱うことができ、いっそう議論を深めることが可能となったと思います。なお、この鼎談の記録は、来年度にお茶大内のプロジェクト「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」事業によるブックレットの一冊として印刷される予定です。有料となりますが、事務局に申し込みいただければ、会員のみなさまにお送りいたします。詳細はHPにてご連絡いたしますので、しばらくお待ちください。

さらに関連企画として保育見学会を開催していただいただけでなく、歴史展示のためにこれまで公開されていない貴重な資料をお貸しいただきましたお茶の水女子大学附属幼稚園にも、心からお礼を申し上げます。

大会には、総数で、81名のご参加をいただきました。ご参加いただいた皆様に感謝申し上げるとともに、これらの企画にご尽力いただいた方々に重ねてお礼を申し上げます。

次回の第11回大会は、高月会員と吉長会員が中心になり、福山市立大学において開催される予定です。会員の皆様の一っそうのご協力をお願いいたします。

大会参加記

朴 淳香（鶴見大学短期大学部）

第10回幼児教育史学会に参加、発表を行わせていただきました。昨年度、第9回大会の直前に入会し、大会に参加、今回で2度目の参加となりました。昨年度の参加の折にも感じたことですが、大会プログラムがすべて一会場で進行するため、参加者全員が同じ発表を聞き、討議に参加、大会内容を共有するという満足感を持ち帰れる大会でありました。

今大会における自由研究発表は4題でした。これまで私は幼児の身体・健康教育についての研究を測定評価の方法により報告していましたが、白梅学園大学の高田文子先生のご指導を受けながら、身体・健康教育の歴史的な研究をスタートし、発表させていただきました。学会で発表するにはまだ十分でない段階だったので、大会期日が迫るにつれ躊躇する気持ちが高まりましたが、全体討論では具体的にご指摘やご意見を頂くことができ、結果的には貴重な機会となったことを大変感謝しています。田邊会員の『幼稚園のための指導書 音楽リズム』は、身体教育の歴史の方向性を左右する内容の報告であり、出かけた先で同郷の人に出会ったような感覚で大変興味深く、身体教育の歴史から見えてくる一つの課題が提示されていたと思います。

午後のシンポジウムは、「子どもと戦争」というテーマで、米田先生（提案者）、寺岡先生（提案者）、湯川先生（指定討論者）による討議が行われました。大会に先駆けて11月21日には、本田先生、宮澤先生、山本先生による鼎談「子ども・戦争・歴史」も行われ、幼児教育と戦争という

テーマで、これまでの研究の蓄積のみならず、戦時下における幼児の生活ぶりの一端を理解するに資するエピソード等もお聞きすることができました。幼児教育と戦争という、おそらく他の学会では取り上げることが難しいであろうテーマで、これだけの論者で構成された討議に参加できる機会はそうそうないものであったと思います。政治と人々の生活は、外からは別々の回り方をしているように見えても、ひとたび戦争に突入すれば、歯車が同時に回り出すもので、その時に幼児教育は何ができるかは、平和な時代の積み重ねだけではどうにもならないかもしれないという難しさを改めて考えました。今回の子どもと戦争をテーマとしたシンポジウム、鼎談に参加して、歴史を研究してきた先生方がそれぞれに深い思想と哲学をお持ちであることに触れることができ、大変刺激になりました。

井本美穂（広島大学・院）

今回はじめて幼児教育史学会に参加させていただきました。大学の行事と重なったため、研究発表とシンポジウムのみの参加でしたが、様々な視点から幼児教育の歴史に迫る発表と、大変活発に繰り広げられる議論を拝聴して大きな刺激を受け、瞬く間に時間が過ぎていきました。

午前の研究発表では、私が関心をもっている幼児の音楽性と身体に関する内容のご発表があり、興味深く拝聴しました。さらに、戦時下の幼稚園教育、戦後の幼稚園教育要領作成についてのご発表と、多岐にわたる内容で、幼児教育史学会の会員の方々の研究内容の幅広さに感銘を受けました。

午後の「子どもと戦争」をテーマとしたシンポジウムでは、戦時中の日本幼稚園協会が幼児の疎開について消極的であったこと、園児から募金を集めて結果的に幼児を戦争に巻き込んだことなどを知り、幼児教育に携わる者は戦時下、どういった姿勢をとるべきなのか、自分ならどう対応するだろうかと、思いをめぐらせました。

『原爆の子』に関しては、「誰を被爆者とするのか」といった問いかけに特に関心をもちました。私は広島に生まれ、何人かの親戚を原爆で亡くしています。祖父は原爆投下翌日に親戚を探しに広島市に入り、その惨状を語っていました。当日被爆した子ども、その日その場にいなくても精神的に影響を受けた子ども、そして被爆した人々の子どもや孫として肉体的・精神的に苦しむ子どももいることを思い、原爆が子どもに与えた影響がいかに大きいかを、討論を聴きながら再認識しました。また、フレーベルとペスタロッチーをそれぞれ国民教育者と社会改革者という観点から捉え、彼らの教育思想が日本における戦争と幼児教育にいかに関連があるかという点について言及があり、大変意義深く拝聴しました。今後私も戦争と幼児教育との関わりについて、一層問題意識を深めていきたいと思っています。

今回の学会で、会員の方々の多角的な幼児教育史研究に触れる機会に恵まれたことは、幼児教育の歴史を学びはじめて間もない私にとり、大変貴重な経験となりました。幼児教育史研究は、視点と方法により大きく展開する研究であることを実感し、私自身の研究に対する情熱が鼓舞されました。次回はぜひ懇親会にも参加して、会員の皆様のお話を伺いたいと思っています。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

寄稿

教育学の〈戦前〉責任 シンポジウム「子どもと戦争」によせて

宮澤康人（東京大学名誉教授）

幼児教育史学会大会の直前に、プレシンポジウムともいべき鼎談「子ども・戦争・歴史」に招

かれて発言しましたが、そのあと、質問をたくさんいただきました。

その中に、私が、戦中の少年時代（国民学校3，4年生のころ）に「特攻隊に憧れ、自分の命を捧げる気持ちになった」と語ったことについて、「その洗脳はいつ解けたのですか。戦後の正反対の教育のなかで、どのような青年期を迎え、自我形成したのですか」というのがありました。

正直なところ、答えは、私自身、まだ見つけていません。

確かに、上からの、教訓的な言説に反発する、何事も疑ってかかる、権威を拒む、という思考方法が、戦中、戦後体験を通して強くなりましたが、他方では、自己を超える、より大きなもの、崇高なるものを求め、そのために自己放棄したい、という心情も、いまだに魂の奥底に深く残っていると感じます。これは世代的、というより私個人の性格も関わっているかもしれませんが。

質問にはまた、「戦中に男の子が熱中したといわれる戦争ごっこが、戦後はGHQによる禁止と、教育の平和主義の文化状況のなかで、戦後、何かに形を変えて存続しているようなことがあるのでしょうか」、というのもありました。

たぶん、暴力シーンだらけのゲームを始め、いじめ、各種スポーツ（とりわけ格闘技的なそれ）などは、形を変えた戦争ごっこではないか、と思います。私自身、野球やサッカーの国際ゲームを観戦していると、侍ジャパンに一体化して、いつのまにか、あれほど、警戒するようになったはずのナショナリスト、愛国者どころか排外主義者（ショービニスト）になっていることに気が付きます。けれども、これは、戦中教育のせいではなく、むしろ、人間本性に内在する、暴力性・破壊本能（タナトス）と、自分に身近な同類に抱く親密感情（エロス）との結合に起因するとも考えられます。

報告者、寺岡聖豪さんの長田新の評価をめぐってですが、『原爆の子』によって戦後責任を果たそうとした長田の志を評価する視点には同意します。さらに、戦中の長田の、戦争協力の発言を糾弾することに弟子筋が、ためらうことも理解できます。私の師匠筋の、勝田守一、海後宗臣、宮原誠一たちも、何らかの形で、戦争に加担する言説を書き残しています。その責任を追及すべきでないとは言えません。しかし、問題の中心は、戦中責任の追及より戦後責任の取り方、とりわけ、いわゆる逆コース以後に、どういう姿勢をとったか、ということにあるのではないかと思います。むしろ、＜戦前＞責任を問われるのは、その弟子筋の私たち以降の世代です。何故なら、いまこそ再び、戦前だからです。

戦争批判を、知識人、国民一般の課題として重視することに並んで、教育学、とりわけ幼児教育学独自の研究課題にするには、どのように問題を設定したらいいか、それをしっかり考える必要があると思います。被害者としての子どもの悲惨な姿を歴史的に記述するだけでは十分ではないと考えます。

人間本性にある暴力性と、他方で、人を、そして、生き物を殺すことに罪障感を抱く、という矛盾する本性の両面を理解しつつ、特に、暴力性とナショナリズムが結合しやすいことを警戒する感性を私たち大人自身がどうやって身に付けるか、それを若い世代にどう伝えられるか考えぬかねばなりません。難しい課題です。難しさは、すでにフレーベルに遡ります。幼な児たちの花園を夢見たフレーベルが、他方で、彼自身が勇敢な兵士であり、彼の幼児教育の狙いには、将来の強い兵士を育てる母親を育てる、という目的があった、とシュプランガーから指摘されたところにも現れています（湯川嘉津美コメント参照）。

戦争に関連した文献のなかで、私が強く心を惹かれたのは、中沢新一と太田光の対談『憲法9条を世界遺産に』（集英社新書）です。もし未読でしたら、是非一読をおすすめします。前に、モンゴル共和国を訪ねたとき、その国の憲法に、「くに」を愛しすぎてはいけない、という一項がある、

と聞いて驚き、感動した覚えがあります。モンゴル人は「くに」を愛しすぎる傾向があるからというのです。確認はしていませんが、そういう思想が明示されていると聞くだけで心強く思います。日本でも、その後、「憲法9条にノーベル平和賞を」という独創的な思想と行動が生まれています。

こういう思想を、教育のレベルで、どのように世界史的、人類史的に位置づけ、意味づけることができるか、それは、幼児教育史の根本課題の一つではないでしょうか。

参考文献

柄谷行人『<戦前>の思考』1994 文藝春秋

野田正彰『戦争と罪責』1998 岩波書店

吉本隆明『私の戦争論』2002 ちくま文庫

グロスマン、D.『戦争における「人殺し」の心理学』安原和見訳、1998 ちくま学芸文庫

追悼

岡田正章先生を悼む

宍戸健夫（愛知県立大学名誉教授）

岡田先生が、昨年、10月に亡くなりました。89歳でした。

謹んで哀悼の意を表します。

岡田先生は、1925年、広島に生まれ、広島大学教育学科に入学。卒業後、東京の宝仙学園短大、明星大学を経て、聖徳大学教授をされました。日本保育学会では、はやくから理事をされ、1991年から、同学会の会長を3期つづけられ、また、その後、日本ペスタロッチー・フレーベル学会会長もされました。本学会にも入会、大会に出席され、いつも鋭い発言をされ、大会を活気づけてくれました。

岡田先生は、日本の保育・幼児教育学研究の重鎮といわれる人でした。

先生と私との出会いは、日本保育学会で幼児保育史研究のための小委員会（委員長は村山貞雄）がつくられたとき、1956年のことです。この共同研究は20年かけて、やっと、『日本幼児保育史』（全6巻、1975）として完成することができました。このあと、岡田先生が中心となった『明治保育文献集』（全10巻、1977）、『大正・昭和保育文献集』（全15巻、1977）、そして、『戦後保育史』（全2巻、1980）の仕事に、私も参加させてもらいました。私は、先生のエネルギーで、しかも、緻密な活動に圧倒されっぱなしで、ずいぶん、勉強させてもらい、感謝です。ありがとうございました。

岡田先生の主著には、『日本の保育制度』（1970）や『保育制度の課題』（1982）などがあります。いずれも、日本の幼稚園と保育所のとの両者の関係を歴史的に分析し、これからの保育制度にたいする展望をあきらかにするもので、貴重な研究成果であるといえます。

これらのほかに、編著・監修として『保育実践講座』（全10巻、1974）や『幼児保育小事典』（1979）などをはじめ、保育・幼児教育関係の広い範囲にわたり、数えきれないほどの仕事をされてきました。

岡田先生の保育・幼児教育学研究への大きな貢献に感謝しつつ、先生の御冥福を、お祈りいたします。

岩崎次男先生を悼む

別府愛（武蔵野音楽大学・非）

岩崎先生の訃報に接したただ驚いています。5年ほど前、叙勲のお祝いの時に、中国や西洋の古典を読む読書三昧の日々ですとおっしゃっていたお姿が印象に残っています。先生は日本におけるフレーベル研究の泰斗であられ、西洋の幼児教育史研究を志す者は先生の翻訳された『人間の教育』、フレーベル研究の著作や論文から多くのことを学び、導かれました。幼稚園の創始者としての評価だけでなく、国民教育家としてのフレーベルに焦点をあて彼の教育思想や教育活動、運動を解明していくことを目指されました。

先生はこの幼児教育史学会の前身である近代幼児教育史研究会の立ち上げ、運営にも大きくご尽力くださいました。1975年、東京教育大学の大学院で非常勤講師として近代欧米幼児教育史のテーマで講義を担当してくださり、その時受講した学生たち（私もその一人でした）からの、是非研究会を立ち上げて先生の下で幼児教育史研究を続けて行きたいという強い願いに応じて、先生を代表者とする研究会がスタートしました。翌年には科学研究費を取得して「世界近代幼児教育史の研究」にまとめ（後に明治図書から『近代幼児教育史』として刊行）、これを契機に研究会を公開し幼児教育史を志す若い人たちや重鎮の方々にも入会していただきました。先生は日本では学校教育などに比べて幼児教育の歴史的研究は遅れている、世界史観点での研究が必要であり、海外と我が国の幼児教育の思想や実践、制度を歴史的に解明し、明日の進むべき道を探りたいと研究会の目的を語っていらっしゃいます。

埼玉大学の先生の研究室に事務局を置いて会を運営してまいりました。会員も増え、特に若い方々が入会してくれ、研究者の情報交換、交流の場としてもお役に立てたと思います。先生が埼玉大学を定年で退かれたあとは榊瑞希子さんの自宅に事務局を置いて続けてまいりましたが、研究会を学会の組織にすることで、研究者の発表や交流の場としてより機能するのではないかという会員の方々の助言や要望で、研究会を発展的解消し、2005年、宍戸健夫先生に会長を引き受けていただき幼児教育史学会としてスタートしました。

今年で学会発足10年になります。先生が40年前に種をまいてくださった日本での幼児教育史研究は着実に進んでおります。先生、本当にありがとうございました。ご冥福をお祈りいたします。

立浪澄子理事を偲んで

榊瑞希子（聖徳大学）

立浪さんが逝去されたのは、2014年7月4日、難病の入院治療を終え、職場復帰に向けて自宅療養中のことでした。私は、OMEPチリ大会（2001年）をはじめ何度か海外にご一緒していましたので、訃報を受けた途端に、その記憶が細部に至るまで呼び覚まされるという経験をいたしました。ここでは本学会とつながりの深いところをお伝えし、立浪さんのお人柄を偲びたいと思います。

立浪さんは、本学会の前身、「近代幼児教育史研究会」に1986年に入会され、以来、会の活動をさまざまところで支えてくださいました。相談ごとには必ずポジティブな答えを返してくれる、事務局にとって心強い会員であり続けてくださったのです。とりわけご尽力いただいたのが、研究発表会・大会の開催でした。

近代幼児教育史研究会時代、「研究発表会」は何年かおきに、東京以外に場所を移して開催されていました。発表会そのものは半日少々で終了するのですが、旅程はたいてい2泊3日でした。参加者は、開催地の由緒ある幼稚園・保育所を訪問し、歴史的遺産や名勝をたずね、見聞を深めました。つまり、開催をお引き受けいただいた会員には、研究交流の会場設営だけでなく、かなりボリュームある事後プログラムをご準備いただいていたのです。

立浪さんには、その大変な役目を3度もお引き受けいただきました。1994年富山県雨晴海岸（第17回総会）、2002年長野県松本市（第25回総会）、そして学会として出発後の2010年第6回大会（長野県短期大学）です。富山では、ここが地元というご主人のご案内で、夏の雄大な立山アルペンルートを散策しました。なんともぜいたくな時間でした。

立浪さんは、研究者であるとともに、志の高い教師でした。保育者養成課程に学ぶ学生の実践力の育成に向けて、創意工夫を重ね、努力を惜しみませんでした。その姿は『実践力を育てる』（立浪さん自身が取り組んだ「保育者養成の実践記録」）の中によく表れています。「保育学は実践科学であり、実践的研究がその学問的方法の中核である」というのが立浪さんの立場でした。

保育の歴史的研究では、ここ数年、松野クララの来日前と離日後の足跡をたどる研究に力を注いでおられ、新たな資料の発見もあったようでした。一部は論考として発表されましたが、立浪さんの構想していたクララ研究は未完のまま残されたように思います。2011年に完成をみた松野クララの顕彰碑建立は、立浪さんが発起人の一人として連絡事務にも携わり、献身的に推進した事業でした。立浪さんは、歴史研究においても実践的な在り方を貫いたように思います。ご冥福をお祈りいたします。

立浪澄子氏略歴：お茶の水女子大学家政学部児童学科卒業、小学校教員、富山女子短期大学、カナダのローレンシアン大学客員研究員を経て、1997年より長野県短期大学幼児教育学科勤務、2010年より同付属幼稚園園長兼務

著書：『実践力を育てる－「学生主体の子育て支援」を通して－』ななみ書房 2013年

新入会員情報

船勢肇（阪南大学・非）

船勢肇と申します。よろしく申し上げます。これまで、大学自治論を研究対象としていましたが、とくに中間団体を問題にする視点に接し、幼児教育も対象にしようと考えようになりました。中間団体という着想は、近年の政治学で「アトム化する個人」などと問題されていることから学びました。

国民国家と資本主義は、共に様々な問題を引き起こしながらも、逃れることはできず、前提とせざるをえないものと考えられます。しかし、国民国家の求める均質化と、資本主義の求める差異化とは、必然的にジレンマを生み出します。このジレンマの中にあって、個人を国家や市場の圧力から守るために、あるいは適合せしめるために、様々な中間領域が絶えず必要とされてきました。そして、国家・個人・中間領域（専門家集団を含む）などのせめぎ合いが通底して存在することとなります。

様々な封建的桎梏から解放された個人は、あてのない自由に投げ出されて自身のよりどころを失い、閉塞状況が長引いたときには、強力な決断をおこなうカリスマ的リーダーに引き寄せられる、といわれます。よって、近代以後も企業や学校などの中間団体は、国家や市場と緊張関係を保ちながらも維持されるべきものとして、重要視されてきました。専門家という存在も、大衆の圧力との緊張関係から、しばしば議論されてきました。

かかるせめぎ合いは現代まで続くものと思われまます。そうであるからこそ、これらの対抗関係・協調関係を分析することは、各時代性の特徴を相対的に把握することに貢献すると考えております。幼児教育においては、国家・家庭・専門家の関係のあり方が重要な論点となってきました。とくに

幼児教育では、特に家庭の存在が大きな論点となりやすい特徴があると考えられます。1920年代以降の幼児教育思想を以上のような分析視覚から分析しようと考えております。皆様のご指導を賜れば幸甚でございます。

新入会員・会員異動 (省略)

事務局からのお知らせ

1) 会則改正のお知らせ

第10回大会総会でご審議いただきました会則の改正ですが、郵送にて会員のご意見をお伺いいたしましたところ、特にご異論がよせられませんでした。これをうけて、会則の変更をおこないました。HP上に改正されました会則をアップしましたのでご確認ください。

新会則に従い、2月1日付けでお茶の水女子大学で事務局幹事として織田望美会員に事務局補佐をしていただくこととなりました。また、4月以降に東京学芸大学で事務局幹事として会計補佐を1名おく予定です。

2) 会費納入のお願い

本学会の会計年度は10月1日から翌年の9月30日までです。今回、振込用紙は、会費納入状況を確認のうえ、第10回大会年度(2014年10月1日～2015年9月30日)とそれ以前の年度の会費が未納の方に、お送りしております。払込用紙に記載された未納分年度、金額をご確認のうえご納入ください。

年会費：一般会員 7,000円、学生会員 4,000円

送金先：口座番号 00190-9-73668、加入者名 幼児教育史学会

今回は該当の会員にのみ用振込用紙を同封していますので、それが入っていない会員は完納状態にあります。なお、2015年3月1日現在の会費納入状況をもとに請求させていただいております。本状と行き違いでご納入いただいております場合は、何卒ご容赦ください。

3) 会報原稿の募集

会報を通じて研究情報の提供と研究者間の交流に努めています。会員研究情報、新会員の自己紹介(全員の方をお願いしています)、海外幼児教育だより、幼児教育史研究への提言などをお寄せください。文量は3000字程度で、メールまたは郵便で、なるべくデータを付けて事務局までお送りください。年2回の会報発行時までには届いた分を随時、掲載します。次回の会報は2015年6月頃に出る予定です。

4) 所属・住所などの変更届けは、学会のメールアドレスまでお知らせください。

幼児教育史学会会報 第19号 2015年3月1日

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

お茶の水女子大学 小玉亮子研究室気付 幼児教育史学会事務局

Tel/Fax : 03-5978-5342

E-mail : admin@youjikyokushi.org

学会 HP : <http://youjikyokushi.org>

郵便振替口座 00190-9-73668 幼児教育史学会